

参考及び引用文献

- ・色川大吉 2012『ある昭和史－自分史の試み』中公文庫（初出 1975 中央公論社）
 - ・色川大吉 2000『“元祖が語る” 自分史のすべて』草の根出版会
 - ・色川大吉・赤坂憲雄対談 2000『いま、自分史の時代』『別冊 東北学』作品社
 - ・小林多寿子 1997『物語られる「人生」－自分史を書くということ』学陽書房
 - ・桜井 厚 2012『ライフストーリー論 現代社会学ライブラリー7』弘文堂
 - ・『思想の科学－自分史を読む』NO120 1989 思想の科学社
 - ・三代純平編 2015『日本語教育学としてのライフストーリー－語りを聞き、書くということ』くろしお出版
- * 学生の自分史からの引用は、『現代社会学科卒業研究要旨』をもとにし、本体から適切な部分のみを抽出した。『要旨』は公開されることを前提にして書かれているので、提出の時点で学生の理解をとってある。カッコ内は卒業した年をあらわしている。

管理栄養士養成、実践栄養士活動のために 必要な職業教育を考える

片 山 一 男（健康栄養学科教授）

1 はじめに

教育とは、一般的に文字通り解釈すれば、教え育てることであり、その意味はその人間の能力を引き出すこととある。さらに教育とは何か調べていくと人間らしく生きるためにあるいは望ましい状態にさせるために必要なもの。社会の中で生きていく為に必要な術、手段。人間が幸福な生き方や生きがいを見出すプロセスと手段、意図的な働きかけ等いくつかの記述、記載を目にすることができる。

筆者は人間らしく生きるために必要なものを教育と称するならば、人間の持つ最も大きい特徴すなわち、理性に対するはたらきかけこそ教育ということばに相応しいのではないかと考えている。このはたらきかけが結果として、はたらきかけた主体と相手との間で共鳴、共感をもたらすことが教育の効果の第一段階と言えるのではないだろうか。

2 医療における患者教育の実践から得られたもの

筆者は本学を含め大学に勤務して今年度で14年目をむかえる。大学の教員になる前に500床台の3つの病院、すなわち精神科7年、急性期医療の現場に21年、通算28年間を管理栄養士として勤務してきた。この間、医療における管理栄養士・栄養士の業務として、患者教育の一つである栄養指導（栄養に関する教育）と管理栄養士・栄養士養成施設から受け入れた実習生への指導を経験してきた。

精神科に勤務した7年間と中間管理職の任にあった後半7年間を除く14年間に実施した個別の栄養相談、指導件数はおよそ4000件であった。

患者教育とは、医療に関わる専門家が、治療にとって有益な情報・知識を患者や患者の家族、介護者に対して、適切に提供し、患者自身の行動変容を起こさせ、心身の状態を改善させるはたらきかけとされる。そして、その目標は患者のQOLの維持・向上にある。

したがって、医療の現場ではインフォームドコンセント、セカンドオピニオン、コンプライ

アンス、アドヒアランスなどが重要なキーワードとしてとらえられている。

ここで注意しなければならないことは、有益な情報・知識の提供やそれに対する理解が得られたことを以て教育の目的が達成されたと思い込んでしまうことである。筆者が病院に就職した当時、職場の先輩から「栄養相談、指導を患者さんの方から複数回指名してもらえるような栄養士になりなさい」とアドバイスされたことを思い出す。これは“情報・知識の提供→理解→行動変容→客観的データの改善→QOLの向上”はいかに教科書的なプロセスであり、現実はそのような図式通りにはいかないという先輩からのメッセージであった。実際の場面で教育というはたらきかけが上手くゆくためには、相手から信頼・共感を得ること、そしてフォローアップが不可欠であることを、相談回数を重ねていくことにつれ気づかされたのである。このことは病院に就職して1年半くらいの時であったと記憶している。知識やそれに対する理解があっても行動が引き起こされない例は数多く経験した。逆に知識、理解がなくとも家族の協力と本人から信頼されたことによって目的が達成された例も経験している。また、個々のケースによる違いもあるが、必要があれば身内や親友に接するように寄り添う対応をしたことも多い。

管理栄養士・栄養士養成施設から受け入れた実習生への指導を担当した立場からの観察では、実習生は限られた実習期間では養成課程で習った知識や技術の確認をすることで精一杯なことが多く、ともすれば対象とするのは人であることを忘れがちな傾向がある。そこで患者のケーススタディへの参加・見学や問題解決志向型の記録法の演習を取り入れることで学生の意識が大きく変わるきっかけとなったことをこれまでの実習終了後のまとめの中で確認している。

3 フィールドでの自身の経験は本学での教育にどのように生かされているか

筆者は本学の健康栄養学科の学生に対する教育は、職業教育に相当するものと考えている。職業教育は、特定の分野、職業に結びつけられる訓練志向の教育といわれ、通常の学校教育の内容に加え、臨地実習、インターンシップや徒弟制度などフィールドでのトレーニングが組み込まれていることが大きな特徴である。したがって、前述したこれまでの経験を学生のためにすべて生かしたいと考えている。実はこれらの多くは教科書に書かれてある知識・技術以外のものであり、ウエイトも大きい。幸い筆者を含む臨地実習担当の教員は各分野のフィールドで長年に亘り実務を経験していることから臨地実習における学生の不安や行動の予測が可能であり、それらを想定したうえで学生の指導に当たっている。また、教育効果を上げるための学生個々の特性を考慮した実習施設への配置も、フィールドでの実務経験が生かされているといっぴよい。現状ではフィールドでのトレーニングのための事前準備のトレーニングが必要であり、実習科目でカバーすることはかなり厳しいものがある。

尚綱学院大学の4年コースに管理栄養士養成課程が設置され、これまで11期の卒業生を送りだしてきた。筆者も本学に着任して今年度で11年目をむかえる。健康栄養学科の職業教育の成果を評価測定することはかなりむずかしい。しかし着実にフィールドで活躍している卒業生は増えつつあり、臨地実習の受け入れ施設で後輩を指導する例がここ数年前から認められるようになってきた。

4 本学の教育の今後に期待すること

本学に限らず、全国的に現在の管理栄養士養成課程における職業教育の実態は未だ完全なものとはいえない。栄養士養成の歴史とカリキュラムの変遷の観点から眺めると国際的に日本は世界に先駆け栄養士という専門職を誕生させたが、数十年の間に欧米での栄養士養成に比べ遅れをとってしまった。それは、栄養士の活動を社会資源としていかに合理的に活かすのかという視点の違いによるものである。栄養学は生きることを学ぶ学問であるはずなのに日本では食べ物の学問と捉えられ、本来あるべき栄養士の業務・活動も世間的には、いまだ誤解も大きい。ここ数十年の間、この遅れを取り戻すべく、栄養士養成のための職業教育も見直され、業務の対象も物から人へ、フィールドのトレーニングも人という対象を意識した内容に移行しはじめてきたところである。

フィールドでのトレーニングを目的とするには、かなり臨地実習の時間が不足しているのが実情である。大学の演習・実習科目で補うことが必要となってくる。これは受け入れ施設に対する義務的制度が整わないかぎり解決はむずかしい。日本の栄養士養成、職業教育上の今後の課題である。

チームワークあるいは多職種連携は、養成課程、フィールドを問わず、その重要さは強調されている。しかしこれまで、どこかでそれを学ぶのかは、あまり論じてこられなかった。何となくではあるが、就職し、社会に出てからフィールドで体験しながら学ぶものと思われているようである。

これも欧米では、専門教育の場でお互いの職業に対する理解を深めておくことで、実践において最大の効果を期待できるよう養成課程の中にプログラムされている。日本のように就職してから、職場において多職種との見解の相違から摩擦を経験してその大切さを知るというような非効率的な学びとは比較にならない。

大学は専門学校とは違い複数の学科があり、それぞれの専門分野を学ぶ場でもある。本学において学科を超えた、互いの立場を理解しコラボレーションする力を体现できる教育プログラムができれば、学生が社会に出てから活動する大きな力になるのではないかと考えている。

冒頭に述べたように教育という最も人間らしい部分へのアプローチと職業教育におけるトレーニング的要素はともすれば相反すると思われる。この2つの要素を融和させつつ、これまでのフィールドでの経験を本学で学生のために生かしていきたい。

多世代交流学習を試みる

松 田 道 雄（エクステンションセンター特任教授）

現在、日本社会の人口減少・少子高齢化の進展は、多世代が交流する機会の必要性をあらゆる領域で我々に投げかけている。子どもたちが学ぶ学校教育では、少ない子どもたちを地域全体で大切に育てようと、コミュニティ・スクール（文部科学省初等中等教育局）、地域学校協働本部（同生涯学習政策局）といった事業を打ち出している。それらによって、例えば、地域の高齢者が小学校の掃除の時間にまで参加し、児童といっしょに掃除をすることで高齢者が